

春日井市

地域福祉に関するヒアリング調査

【調査結果報告書】

目次

1	調査の概要.....	1
	(1) 調査の目的.....	1
	(2) 調査の実施概要.....	1
2	調査の結果.....	1
	(1) 担当地区.....	1
	(2) 地域において特に話題に挙がる悩みごとや不安等.....	2
	(3) 地域において感じている課題や現状.....	3
	(4) 既存の制度やサービスで対応が難しい、単独では解決できない課題.....	6
	(5) 複合的な課題等への対応.....	6
	(6) 地域において不足していると思われるサービスや支援.....	7
	(7) 地域における課題解決に向けて現在連携していて有効であった団体や専門職.....	8
	(8) 地域福祉推進にあたってキーマンとなると考えられる団体や専門職.....	9
	(9) 連携にあたっての課題.....	10
	(10) 担当地区における地域福祉に関する好事例.....	11
	(11) 地域福祉について日頃から感じていること.....	12

令和6年3月

春日井市

1 調査の概要

(1) 調査の目的

令和7年度を初年度とする「春日井市地域共生プラン」の策定にあたって、地域における課題や課題への対応に求められる施策、資源等を把握し、基礎資料とすることを目的とします。

(2) 調査の実施概要

- ①調査対象 : 地域福祉コーディネーター5名
- ②調査方法 : シート調査及び面談聴取
- ③調査期間 : [シート調査]令和6年2月15日～2月29日
[面談聴取]令和6年3月5日

2 調査の結果

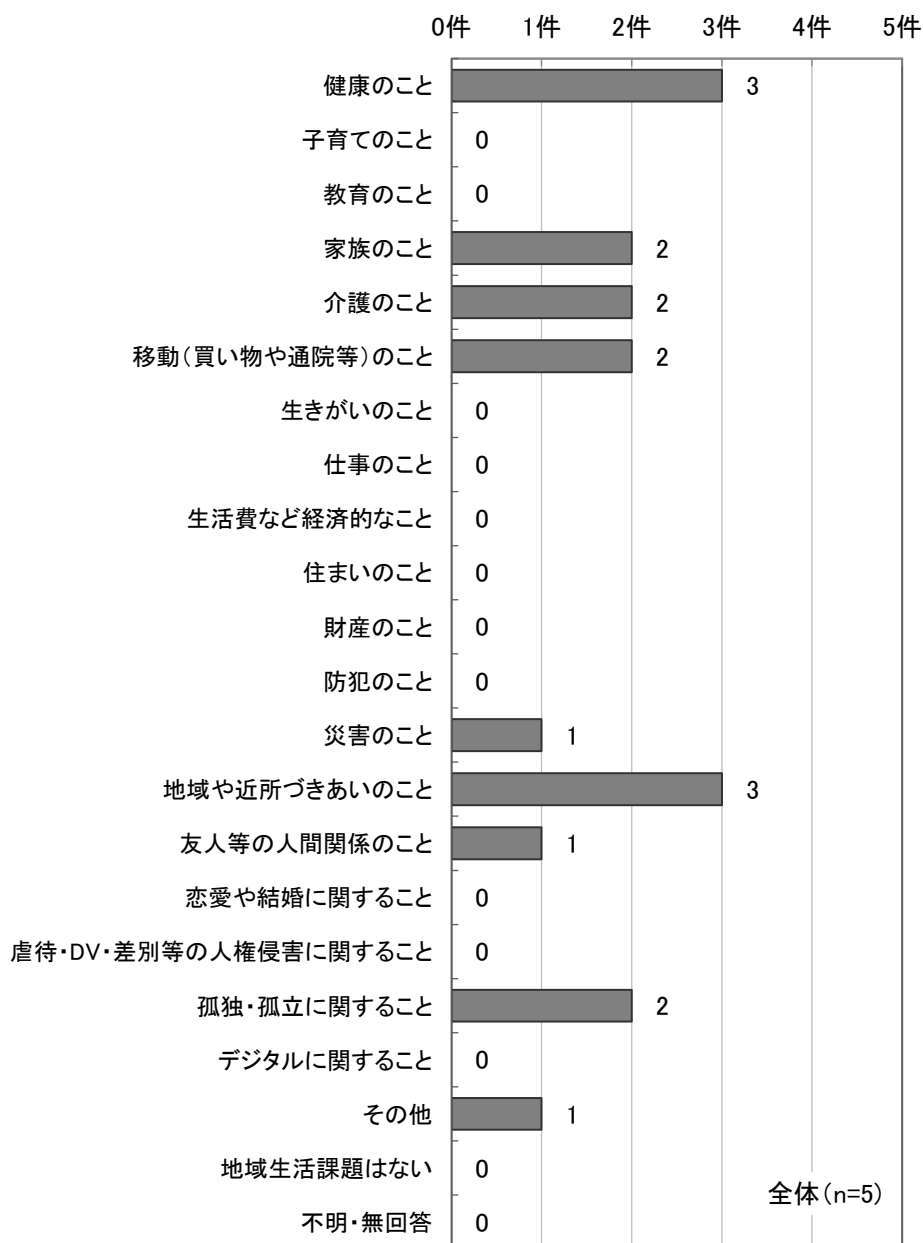
(1) 担当地区

各地域福祉コーディネーター（A～E）の担当地区は下記の通りです。

地区 地域福祉 コーディネーター	坂下地区	高森台・石尾台地区	藤山台・岩成台地区	高蔵寺地区	南城地区	松原地区	東部地区	鷹来地区	柏原地区	中部地区	西部地区	味美・知多地区
A	●											
B				●	●					●		●
C								●				
D		●					●		●	●	●	
E		●	●			●						

(2) 地域において特に話題に挙がる悩みごとや不安等

担当地区において、特に話題に挙がる悩みごとや不安等について、「健康のこと」「地域や近所づきあいのこと」がそれぞれ3件、「家族のこと」「介護のこと」「移動（買い物や通院等）のこと」「孤独・孤立に関すること」がそれぞれ2件となっています。



(3) 地域において感じている課題や現状

① 子どもの居場所や学習支援に関すること

子どもの支援を行っている支援者との繋がりが乏しいが、世代間交流の活動に地域活動者としては注目している人材が多い。

地域福祉コーディネーターの業務において、高齢者に焦点が当たっているため、子ども食堂やフードパントリーの把握はできているが、現状として子どもの地域福祉活動に目を向けたくても、取り組めていない。

子ども食堂の若い人や地域のNPOなどの20～30歳代の若い代表の方に話を聞くと、なぜ自分たちを対象とした地域活動の場がないのか、と交流等の機会を求めている。企業も地域貢献できる機会を探しており、地域のサロンに入って交流できないかという声も聞く。地域の方は、平日日中働いているから活動に参加できないと思い込んでいると思うが、そういったニーズがあることから知ることが重要。

地域に住んでいるのは高齢者だけではないので、若い人や障がいのある人、高齢者も誰もが参加できる取組があるといい。中でも小中学生・高校生にさらに目を向けるべきだと考えており、高校生が地域活動したいときに相談できる場所があるといい。

若い人にとっての居場所、働き盛り世代の地域の居場所など世代に応じた居場所があるといい。子ども・若者が困ったことや悩みがあった時に専門機関に相談するのはハードルが高いと思うので、それを地域で内包できるような居場所やしくみが必要。

② 障がいのある人への支援や社会参加に関すること

障がい者の方がもっと地域交流等を通して社会参加の場を広げていくことができれば良いと感じている。社会参加を通して、様々な体験を通して多くのつながりを作っていけたら良い。

障害者自立支援法77条に基づく自立的自発的事業への支援が不足している。

③ 高齢者の介護や見守りなどに関すること

地域見守り事業やちょっとお助け、認知症サポーター等の見守りの仕組みづくり等は少しずつあるが、盛んに行われているという印象はない。

地域見守り事業は協力員の高齢化により、支援できる活動が限定されている。

一人暮らしの方も多いため、コロナ禍以降孤立している高齢者の見守りの必要性が注目されている。

認知症になった方の継続的な住民主体活動への参加。

④ 生活困窮者への支援に関すること

地域食堂や子ども食堂に毎回顔を出すお子さんがいるということは聞いている。複合的な課題を抱えていて、代表に少しずつ話してくれるようになってはいるが心配な状況という話も聞いている。

⑤ 防犯・防災に関すること

回答なし

⑥ 移動支援に関すること

坂下地区では高齢化率が高く、山間地区ということもあり移動手段の問題がある。バス等はあるが本数や時間の制限があり、現状として利用率は減っている。今は車に乗れているがあと4～5年後にバスを利用できなくなった場合の移動手段を心配する声もある。

鷹来中学校区は移動に困るという課題がある。最近地区に30～40人集めるようなサロンが3つほどある地区だが、最近そこまでも行けなくなっている人が増えている。上田楽町は横に長い地区で、東側でサロンをやっていて西側に住んでいる人が行けなくなったという話があった。サロンに行けなくなった人達が協力して、身近な地域でサロンを立上げ、一部課題が解決したが、移動手段の課題は今後も出続けていくと予想される。

桃山町には商業施設がなく、免許返納後は家族の送迎がないと買い物に行けない状況。自由に自分で買い物に行ける手段があれば桃山町に長く住めるのにとという声が民生委員などから挙がっている。バスの路線はあるが、午前中に言ったら午後には帰れないようなダイヤであったり、車に比べるとバスでの移動がしんどかったり、自転車でちょっとした買い物は行けても重いもの（醤油や米）を持って帰るのは難しい状況。

モデル事業として2か月に1度サロンが終わった後にタクシーを予約してみんなで買い物に行くことで、みんなで買い物に回る練習をする取組をしている。しかし、利用者から好評というわけではない。移動や買い物について危機感はある課題としては挙がるが、いざ仕組みを作ると「いまはいい」となる。いつか自分たちが困るまでに誰かにすごく改善してほしいというニーズ。仕組みを作っても利用者は多くはなく、この文化を育てたいという人が利用している状況。乗り物に関しては課題解決のために何かつくっても実際利用されないというギャップは多いように感じる。

圏域が広く、買い物ができるスーパーがない町もあるため、今後買い物や通院に不自由する人もでかねない。地域活動も行われている地区ではあるが、その集まりの場まで行けない高齢者も多くなっている。

高齢化により地域活動などの会場に出向くことが難しい人が増えている。送迎支援が必要。

⑦ 地域福祉活動の住民参加・交流に関すること

サロン等の代表の方の負担が極めて大きいわけではない。代表者・協力員が運営で参加者はお客さんという関係性になっているところが少なくはない。とある地区で特にそういった状況が際立っているサロンがある。サロン活動でやりたいことを募集しても参加者からの反応がないため、代表者は辛く、サロンの継続を悩んでいる状況。そういった言葉に寄り添っていくのが地域福祉コーディネーターの仕事であるが、サロンの代表者のように地域活動の役員の負担というのは、地域の人が担うには大きいように感じる。

現在の担い手が古くから活動を続けている団体や活動について、活動自体は存在するが、担い手の高齢化が進み今後新たな展開が難しくなっている。

高齢化により参加者が減少しており、新しい参加者の増員が必要。

参加者の高齢化が進み、今まで以上に配慮やケアが必要になっている。

参加者が少なく、スタッフが10名に対して参加者が1名という状況も聞いたことがある。そうすると活動者のモチベーションが低下し、活動をやめる方向に意識が向いてしまうことが懸念される。

特に子育てサロンの数が減っている。要因としては、協力員の人手不足や子ども自体の数の減少による参加者の確保が難しいことに加えて、利用者のニーズの変化が考えられる。グリーンパレスやグルッポふじとうなどのようなプロの子育て支援の参入により「役割を終えた」とサロンを閉じるケースが特にニュータウンで進んでいる。

長くあるサロンは現在参加している人たちのためにあるものと周りから思われていることもあるが、そう思わせないために、「新しい人ウェルカムキャンペーン」を打ち出したり、公民館で活動しているだけでは活動の実態や雰囲気を知ってもらえないのではということで公園など外に出て自分たち自身が公告になり、仲間を増やして通常の活動の参加者につなげたりしている地区もある。活動を継続するには新しい人を受け入れるしかないが、新しい人を受け入れてうまくいっているところ、いないところがある。

新規の人を受け入れなければという動きはここ2～3年の話で、中には今活動しているメンバーで終わらせようという思いで活動しているサロンもある。

⑧ 地域の担い手づくりに関すること

坂下地区は、岐阜寄りの地域は人口が少なく、若い世代の転出や高齢化が進んでいる地域が多い。サロン等の協力員も高齢化し、若い人の参画がないという声を聞く。今後地域を担っていく後継世代を見つけていくのが難しくなっていくのではないかと感じる。

後継者がいないこと。なりたがる人が少ない。代表者の高齢化。担い手の業務・責任等の過重負担。担い手がいらないことで続けられないサロンも多い。

担い手の高齢化で新たな担い手となかなか出会うことが出来ていない。

担い手不足であり、後継者づくりが必要。

⑨ 身近な場所での相談窓口に関すること

民生委員、域包括支援センターの周知や紹介を主に行っている。

(4) 既存の制度やサービスで対応が難しい、単独では解決できない課題

子ども・子育て（居場所、ヤングケアラー含む）

自立支援ホーム居住者の社会参加の機会が必要であり、地域活動では高齢化や担い手不足が深刻化しているため、マッチングできると良い。

障がい児・者（医療的ケア児、発達障がいを含む）

障がいのあるお子さんを持つ家族から、自分の子どもを含めて地域の人幅広く集える居場所を立ち上げたいという相談があった。（障害者自立支援法第77条に基づく地域支援事業と自発事業）しかしながら、国が行っている支援の方法を話す中で、市の計画を見たところ「立ち上げ」と「運営」が断ち切れになっていた。他自治体を調べると、豊田市は立ち上げや運営まで一貫して支援する方法になっていた。現在、市ではこうした希望への一貫した支援が不足しており、立ち上げについて民間の賛助等を組み込んだ変則支援とならざるをえず、希望者の負担増となった。一貫した支援があるといいと感じた機会であった。

障がい児・者（医療的ケア児、発達障がいを含む）／高齢者（認知症、見守り等）

障がいを持つ人が気軽に集まったり、地域の人と交流が出来る場がない。サービスに繋がってはいるが、地域住民との理解や交流が必要なケースの解決策が少ない。

(5) 複合的な課題等への対応

課題の把握について

地域福祉コーディネーターとしてヤングケアラーや8050世帯などの課題をキャッチすること自体はあまりない。高齢者課題を解決する過程で8050問題などが内包されていたということはあるが、ワーカーなど直接支援に携わっている人の方が把握している。

地域福祉コーディネーターの関わり方について

個別の課題でも地域で複数ありそうなケースは地域福祉コーディネーターが入って一緒に解決に向けて動くことがある。具体的には、免許返納による移動の問題や健康づくりの場づくりに関する課題など。

地域ケア個別会議について

地域ケア個別会議はケースカンファレンスとは違い地域課題になり得るものを挙げて気付きを促す会議であるため、個別の課題を拾う場ではない。

(6) 地域において不足していると思われるサービスや支援

不足しているサービス・支援	不足していると感じた背景など
移動・移送支援	
移送支援	サロンに通うのに、同じサロンに参加している方が毎回車を出して迎えに行ったり、途中で事故に遭ったり、歩いていくのが大変だったりという理由でサロンを辞めるなどの背景がある。
使い勝手の良い移送のサービス	地域活動の場に対して物理的な距離が遠い、または体力低下や車の運転免許の返還などで移動手段がなくなってしまう。
公共のバスや飲食店の送迎バスを使用した送迎サービス	住民主体活動に参加したいが、会場までの移動が難しいと感じている高齢者が今後も増えることが予測される。公共のバスと連携したり、営業時間外で使用していない時間帯で飲食店の送迎バスも使用できたりすると良い。
専門的な支援	
専門職との連携	身近なところに理学療法士やケアマネジャー、看護師といった専門職との連携を図ることができていないのが残念。知識として持っておくだけではなく、そうした存在もあるとよい
地域の活動者への支援	
地域活動代表者へのフォロー	どの地域活動に伺っても、個人的に代表者の方の苦勞が計り知れない。一年のイベントを考えるとところから、お金の管理、参加者の把握などに追われ、追い込まれていることが多い印象。
地区社協等の役員となるインセンティブ	高齢社会と高齢者就業環境の変化（70歳定年制など）での人材不足とボランティアは無償であるとの意識。
子ども・若者支援	
子ども・若者世代への支援	地域で困っていて孤立化しているのは高齢者だけではないということを今一度考える必要がある。地域に出る中で情報として若者の話を聞くこともあるが、支援の手を延ばせないのが心苦しく、もっと子どもや若者世代向けの地域支援を行えたら良いと思うのと同時に、そうした専門機関との関わりも地域で持って行きたいと強く感じている。
多世代交流	
子どもと高齢者の交流の機会づくり	近隣に保育園がある住民主体活動を行っている公民館や集会所を目にするが、どちらも平日の昼間に活動しているのに接点がない様子。

(7) 地域における課題解決に向けて現在連携していて有効であった団体や専門職

団体・専門職等	連携した具体的な内容
町内会・自治会	コミュニティーファーム等組織化の際に協力等（担い手、代表、周知）を受けている。 地域で活動をするにあたって、町内会や区の理解を得られずに始められたことは少ない。説明をした上で、快く地域活動に協力していただくと、今後の地域活動を発展・継続させていきやすいと感じている。
民生委員・児童委員	地域見守り活動や主体活動立上げの際に協力（啓発、担い手）いただいた。
高等学校	若い世代を中心とした地域参加は効果的である。とりわけサロン等における大学ゼミのスマホ教室の開催や高校生ボランティアの存在は、世代間交流と新しい知識の交流になり、サロンがとてもいい雰囲気になる。
大学・専門学校	SNSの講師やイベント実施時の協力（講師、担い手）を得た。 大学生によるSNS教室は、SNSクラブ立ち上げに際して大学に地域包括支援センターや社協からSNSが苦手な高齢者に何とか教えてもらうように依頼し、ゼミのフィールドワークの一環として位置付けて価値を見出し、授業として来てもらえるように調整してもらった。ゼミ生は地域に出てフィールドワークができる、高齢者は若者との交流とSNS活用のノウハウの獲得ができるというのをWIN-WINでできたのでよかった。しかし、そういったゼミがいくつもあるわけではないので横展開し得るものではなかった事例である。1年ほど継続して来てもらい現在はすべてのプログラムが終了したので、教室も終了した。SNSクラブの活動は自走し、継続して地域の情報を発信している。
ボランティア団体（NPO）	認知症家族交流会で、家族のこころのケアについて、NPOの取組が大きく貢献しているとの発言があった。
地域包括支援センター	地域課題の発見、課題の共有、課題へのアプローチ、フォロー等高齢者分野の地域へのアプローチはすべて地域包括支援センターと連携を行っている。
老人クラブ	地域活動の拡大や参加者の受け入れなどの際に協力（サロン創設、高齢者受入れ）いただいた。
地区社会福祉協議会	活動依頼、活動者の紹介、世代間交流等の地域活動のあらゆる側面で相談・協力関係にある。 地域活動の母体として地域に地盤を築いている地区社協だからこそ、お願いできることもある。また、地域の担い手という面で見ると非常に強力な存在であることは言うまでもない。三世代交流事業や子育てに対する支援といったように地区社協だけでなく、こうした機能を持ったグループができてくるとよいと感じた。
障がい者生活支援センター	地域参加や交流の必要な人がいた際の紹介・伴走。

団体・専門職等	連携した具体的な内容
企業	地域活動への送迎、活動の場の提供、資金・景品の提供等。
商店	活動の場の提供、見守り協力。
町内会・自治会／ 民生委員・児童委員／住民主体サービス	新しい活動の立ち上げ支援を行う際に、公民館や集会所の使用許可、活動内容をお知らせする際の回覧板での配布依頼等や、関わりのある方への声かけ、運営する上での協力員として活動している。
住民主体サービス／ボランティアセンター	住民主体活動の担い手不足の課題を近隣の地域の方のだけで解決することが限界になっており、ボランティアセンター登録者に興味のある方に、担ってもらえるよう働きかけている。
高齢者入所施設（特養、グループホーム等）／薬局（薬剤師）／その他（喫茶店）	地域の方にとって馴染みのある喫茶店（おれんじプラスカフェ登録店舗）のスペースを活用して、早期の段階から生活相談を乗ってもらえるよう、施設や薬局の持ち回りでミニ講座を開催している。 おれんじプラスカフェに登録してもらっている店舗等には現状何かあった時の接客や対応はしてもらえと思うが、交流会をしている店舗はない状況でもったいないと感じている。そのような中、地域ケア会議の中で、要介護の状態認定を受けた方が地域におり、おれんじプラスカフェでの交流や地域包括支援センターの早めの介入があれば、要介護状態になる前に把握できたのではないかという話が出た。地域包括支援センターを知らない人も多かったり、地域包括支援センターを知っていても相談しにくいという人もいたりするので、何か困りごとがあった時に気軽に相談できるような会が定期的に身近な場所であるといいということで、理解いただけるようであればスペースを借りて生活相談会ができればお互いWIN-WINだし、協力いただける薬局があれば見守りやより介護予防になるのではないかということで話が進んでいる。

（８）地域福祉推進にあたってキーマンとなると考えられる団体や専門職

団体・専門職等	連携したい具体的な内容
小学校・中学校	小学校・中学校に限定せず、若い層に幅広く着目したい。学生ボランティアやゼミ、クラス単位になると、エネルギー的なものを地域に持ち込んでいただけると感じている。現に、若い人が地域に来てくれてうれしいといった声もたくさん挙がっている。
ボランティア団体（NPO）	株式会社のよう利益を追求する組織では、様々な軋轢が生じる。されどいわゆる地縁団体では、役員の交代による経験不足が顕著となり支障が生じる。こうした廻間を埋めていける組織としてNPOなどには期待ができる。
当事者団体	当事者として必要と感じる地域支援や、求めている地域交流など、地域共生に必要な情報を得ていきたい。
障がい者生活支援センター	障がい福祉圏域のニーズが増えてきていると感じており、課題の発見や情報共有などでの連携が増えてくると思う。

団体・専門職等	連携したい具体的な内容
企業	地域という括りで考えても、企業の協力・つながりは大切にするべき。地域に対する新しい提案や、一緒に物事を進めていく中で地域に強力な味方を増やすことになると感じる。 担い手不足の課題が深刻化していく中で、企業の地域貢献がハード面、ソフト面ともに協力いただきたい。 お金の協賛や物品、資材の提供をしてほしい。大掛かりなイベントするにもチラシに協賛企業が入っていると来る人が増えるのではないかな。
ボランティアセンター	地域活動の担い手だけでは、サロンや交流イベント等を開催することが難しくなっていると感じている。そこでボランティアとの連携を一層深いものにし、地域の協力員として活動していただきたい。
病院・クリニック	病院やクリニックは必ずと言っていいほど高齢者の方が訪れる場所。そうした場所におけるピアカウンセリングや、孤独防止の集まりなどがあればよりよい地域になるのではないかと感じている。病院というよりは地域に根差したクリニックに着目したい。
みんなの家	日常的に高齢者の方が集えるような場所をより多くの人に活用してもらえように、連携できると介護予防にも繋がる。
高等学校／大学・専門学校／若者サポートステーション	地域活動をはじめたきっかけは民生委員をやっているそのままというものが多く、どうしても高齢者の方が集まりやすい状況にあり、若者の参加のきっかけがない。子ども・若者に対して点字や車いす体験などの福祉学習は充実していると思うが、身近な地域のサロン等については知らないと思う。若年層に地域活動に興味を持ってもらえるような働きかけを早期のうちから行うことで地域活動に参加するきっかけが増えるのではないかな。

(9) 連携にあたっての課題

団体・専門職等	連携したい具体的な内容
企業	企業は地域貢献の仕方がわからなくて手の出し方がわからない。地域は企業側の熱量がわからないという状況。また、場所等を提供したいという企業側の思いがあっても地域の需要がないとマッチングしないのが難しいところ。 マッチングしやすくするために「企業バンク」のようなものをつくることも考えたが、企業側の状況や事情も変化するので、単純な情報の蓄積では機能させるのは難しい。 初めの関係づくりが難しいため、成功体験と関係性がある企業に頼りやすくなってしまふ。一方で、機会やチャンスを失わないように継続的な関係づくりの積み上げも重要。

(10) 担当地区における地域福祉に関する好事例

事例	内容
地域の居場所づくり	地域の人に憩いの場所として親しまれていた喫茶店が閉店することになった。そこには、毎日多数の常連さんが通っており、ここにくることが楽しみという声も聞いていた。そうした地域に親しまれた居場所がなくなることによってそこに通っていた人の居場所もなくなってしまう。そこで、付き合いのある近くの喫茶店のオーナーに割引のチケットチラシを作成していただき、どなたでもどうぞと掲げて、その方たちを受け入れたこと。その方たちは、今も新しい喫茶店に通われているとのこと。春日井市内ではこうした個人経営の喫茶店がやむを得ず閉店しているということを最近とても多く聞いている。今回の成功事例を活かして、今後同じ展開になった時に取り組めるようにしたい。喫茶店のオーナー、閉店のお店のオーナー、地域包括支援センター、地域福祉コーディネーター、民生委員等が連携を取れた事例だったと感じている。
コミュニティナースの行う地域活動	専門職が地域活動者となり、その専門性を活かす活動を行うことによって、居場所、健康、専門機関へのリンク等が期待できる。 今年度の地区内で新たに「コミュニティナース」によるサロンが立ち上がった。この事例は主催者が現役ナースによる地元根付いた取組となったが、「コミュニティナース」は決して現役ナースだけが行う活動ではないとのこと。今後、このような「コミュニティナース」が活躍することが期待される様々な場面が現れると考える。
認知症当事者の会	地域参加を躊躇しがちな認知症当事者の集まりの会を毎月開催している。同じ境遇の人同士気兼ねなく参加できることが人気となり、一度途絶えた地域関係を取り戻し、元々ある地域活動への再参加までの誘導が期待できる。認知症支援には当事者を支えている家族への支援も重要だと活動を通して感じている。
未来ヴィレッジ手仕事プロジェクト	手芸が趣味・得意である高齢者が地域の中にいるが、せっかくの作品を披露する場や提供できる機会がない。 →作品を商品として協力してもらえるお店で販売 →売り上げ金で地域の小学校で活用できる物品を購入し贈呈 →小学生からの感謝のメッセージが作品提供者へ届く
石尾台地区の移動支援「ゆっくりカート」	石尾台地区は協力員が30～35人、利用希望者が60人ほどおり、利用者も利用希望者も多いのが特徴。地区社会協議会の協力員が行っていた移送支援が前身となり、現在はNPOを立ち上げ、大学や民間との相互連携により「ゆっくりカート」として運営している。 老人クラブに参加できなくなった人が参加できる日をつくるということで「ゆっくりカート」をチャーターして送迎をするといった活用もされている。

(11) 地域福祉について日頃から感じていること

地域福祉全体に関すること

地域福祉に関しての社会的認知度が低い。

高齢者を対象にしすぎていて、未来を担っていく若者に対しての支援等があまりみられない。

地域活動の助成金等がどれも高齢者や年齢の縛り等を設けていて、柔軟に活かすことができていない。結果、本来行えるべき地域活動等もあきらめざるを得ない結果が出てきている。

何のための地域活動なのか今一度考える必要がある。

単なる介護予防で終わっていいのかと常を感じている。高齢者の娯楽になっていては意味がないのではと感じてしまう。

地域という言葉はエリアに住んでいるすべての人が対象となるはずなのに、地域福祉とうたっておいて、高齢者向けの施策が中心なのはなぜか。

地域福祉の目指す目標はなにか。

地域活動・担い手に関すること

地域活動の担い手になっても良いがきっかけがない、〇〇活動なら参加しても良いのかなど担い手予備群の方との出会い方、地域参加へのきっかけ作りが難しい。

これまで地域の方に向けて、地域活動の活動自体の紹介はしてきたが、地域活動をやってよかったという声や救われた人などポジティブな部分に焦点をあてることがなかった。こういった面を広げることで地域活動の印象を変えていけるとよい。

関係機関との連携に関すること

日々の業務に追われると情報収集ができなくなってしまうので、関係者で状況共有する機会があると連携やより効果的な支援にもつながると思う。

認知症施策に関すること

現行の認知症支援をみているとあまりにも足りないと感じている。特に認知症カフェ(春日井おれんじプラスカフェ)の仕組みは、本来達成すべき目標や意味を内包していないように思う。どうして、交流会等を前提とせず、受け入れる方向に集中したのか。地域の方を始め、お店のオーナーさんからも疑問の声が増えてきている。認知症の方を受け入れる場所として実際に認知症の方が来た事例というのあまり聞いたことがない。地域に貢献したいという思いをもって登録してくれているオーナーさんばかりだと思うので、モチベーションアップにもつながるよう本来の役割を果たすことができるよう活動を促進できるとよい。